

B：宮城県コース

「現地を訪問して想うこと」

匿名希望

宮城県コースに参加させていただいた。はからずも、最遠・最年長の参加であった。このたびの復興支援企画に対し敬意と感謝を申し上げたい。

このたびのツアーで一番の感動は、南三陸町の「防災対策庁舎」の前に立ったときである。津波警報と避難を放送し続けた女性の声が思い出され、思わず目頭が熱くなった。災害にめげずに頑張っておられる校友にお会いできたことも喜びであった。缶詰工場再建を果たされた石巻市の木村さん、同じく、かまぼこ工場の再建を果たされた名取市の佐々木さん。ますますのご活躍をお祈りします。

私は、前日から東北に入り、20 数年ぶりに会ういとことレンタカーで気仙沼以北の被災地を訪れた。4階まですべての窓がなくなっている5階建のアパート。国道からは、修復中の「奇跡の一本松」に代わるダミーの一本松が見える。その近くでは数千トンはあると思われる大型漁船が海岸から三～四百メートル打ち上げられ放置されたままだ。偶然訪れたホテル屋上から見た漁港の眺めは、津波当日、実時間でTV放映されたあの画面。タイムスリップしたようなふしぎな時でもあった。

これまで、物の豊かさ・生活の便利さをひたすら追い求めることに、うすうす疑問を持ち始めた矢先に起こったこのたびの大災害。やっぱりそうであったかと思った人は多かったのではないか。豊かで便利な生活と引き換えに希薄になった人と人とのつながり（絆）の回復が改めて見直されたのだと思う。日本が成熟した社会となるためにも、このたびの大災害を風化させてはいけないとつくづく思った。人間の傲慢さと自然を前にした人間の無力さを気付かせてくれる何かを遺産として、原爆ドームのように残すことはできないだろうか。